様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：２７１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１１６７２

研究課題名（和文）トリプルP介入によって発達障害児をもつ母親の子育てレジリエンスは向上するか

研究課題名（英文）Does parenting resilience of mothers with children with developmental disabilities improved by triple P intervention?

研究代表者
江上　千代美（Egami, Chiyomi）

福岡県立大学・看護学部・教授

研究者番号：５０５４１７７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：発達障害のある子の母親の養育レジリエンスを向上することを目的に、認知行動療法（Stepping Stones Triple P:以下、トリプルP）による介入を行い、トリプルP介入前後の母親のレジリエンス、子育てへの適応、精神的健康について検討した。その結果、トリプルPの介入によって、母親の養育レジリエンス、子育てへの適応、精神的健康の全ての尺度において、介入前より介入後が有意に上昇した(p<.001)。

研究成果の学術的意義や社会的意義
発達障がいのある子ども親は子どもの情緒や行動の問題に上手く対応できないことやメンタルヘルスを低下させやすく、これらは子どもに影響し、情緒や行動の問題が悪化するという負の連鎖を導きやすい。この問題を解決するには、親の養育レジリエンスを向上させる支援が必要である。今回の結果から、トリプルPによる親への介入は養育レジリエンスを向上させ、子育てに適応し、メンタルヘルスを改善させることができる。これは発達障がいのある子どもの生活基盤である家庭が安定し、子どもの生活習慣や社会への適応を促すことにもつながるために親の養育レジリエンスを向上させるトリプルPによる親支援は社会的意義が大きい。

研究成果の概要（英文）：For the purpose of improving the parenting resilience of mothers with children with developmental disorders, We performed Stepping Stones Triple P(Triple P) intervention and examined mother's parenting resilience, adaptation to parenting, and mental health before and after triple P intervention.As a result, triple P intervention significantly increased after intervention compared with before intervention in all measures of maternal parenting resilience, adaptation to parenting, and mental health (p <. 001).

研究分野：看護学

キーワード：養育レジリエンス　発達障害のある児　子育てへの適応　精神的健康　母親

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

発達障がいのある児の母親は継続的に子育ての困難に対応しなければならないハイリスク状況におかれることが多く、それを克服する力である養育レジリエンス[1)]を向上させる支援が必要となる。先行研究では養育レジリエンスとストレスは負の相関関係にあるため、発達障がいのある児の母親の養育レジリエンスを高めることがストレスの軽減につながると推測されるものの、どのような母親支援が養育レジリエンスを向上させるのか不明である。

注意・欠如多動性障害や自閉症スペクトラムに対しては、薬物療法のみではなく、認知行動療法や行動療法などの親支援プログラムを活用し、親や取り巻く環境に働きかけることが治療効果の向上につながる[2,3)]。特に、母親の適切な養育行動は子どもの問題行動のリスクを減少させることや不適切な場合に子どもの困難さを増加させるなどが報告されている[2,3)]。トリプルP[4)]は世界保健機構（WHO）の2009年の報告書に推奨された２つの子育てプログラムの一つであり、世界25か国以上の国で家族支援プログラムとして使用されている。トリプルPは親の知識・技術・自信を高め、子どもの行動面と情緒面および成長過程の問題を予防して対処できる、親の自己統制力を育成することを目的としたプログラムである。プログラムのセッション内容を1回/週、9セッション行う。トリプルPのこれまでの研究から、親の不適切な子育てやストレスの軽減、虐待や児童施設での保護発生率の減少、子どもの問題行動の減少などが報告されている[5)]。トリプルPは親支援に効果的なプログラムであるが、レジリエンスとの関係は明らかにされていない。発達障害児をもつ親と子どもにとって効果のあるプログラムであるが、発達障害児をもつ母親のレジリエンスを向上させる支援プログラムとしての立証に至っていない。

２．研究の目的

本研究は発達障害児をもつ母親を対象に、認知行動療法（stepping stones triple P:以下、トリプルP）による介入を行い、トリプルPの受講による母親の養育レジリエンス、子育てへの適応およびメンタルヘルス検討する。

３．研究の方法

1)対象者：対象は研究参加への同意が得られた母親167名中、分析対象者は103名（61.7%）であった。

2)質問紙とデータ収集：発達障がいのある児をもつ母親を対象にトリプルP[4)]を開催し、受講前、中（5回）、後に養育レジリエンス[6)]および子育ての適応や精神的健康[7)]について郵送式調査を行った。質問紙は以下である。

(1)<u>養育レジリエンス尺度</u>：本研究では、鈴木が開発した養育レジリエンスアンケート（PREQ）[6)]。PREQは発達障害のある子供に関連する課題や困難に適応するのに役立つ要素を母親がもっている度合いを測定する養育レジリエンスアンケート（PREQ）の 16 項目の尺度である。参加者は、1（強くそう思わない）から7（強くそう思う）の尺度で各16項目を評価した。PREQは、「子供の特性に関する知識」、「ソーシャルサポートの認知」、および「子育てに対する肯定的な認識」という 3 つの要素に基づいて総合スコアを算出する。PREQは、十分な内的信頼性（子供の特性に関する知識）を 0.81;社会的支持を感じた0.83;子育てに対する肯定的な認識0.82)。

(2) <u>子育ての適応と精神的健康に関する尺度</u>：子育てに関する 18 項目と家族への適応に関する12項目の計30項目で構成されている[7)]。子育ての適応に関しては、子育ての一貫性・強制的なしつけ・前向きな励まし・親子関係・家族関係・親のチームワークの下位尺度で構成されている。精神的健康：親としての適応の下位尺度を活用した。全項目4件法であり、スコアが高いほど問題があることを示す。

3)倫理的配慮：本研究は久留米大学研究倫理委員会（No.23-268）により承認を受けた。研究内容を文書と口頭で説明し、自由意思で研究に参加し、途中で同意を撤回しても不利益を被らないことを説明し署名にて同意を得た。本研究において利益相反はない。

４．研究成果

１）**養育レジリエンスと下位尺度の変化:**<u>養育レジリエンス</u>は受講前5.06±0.69、受講中5.33±0.68、受講後5.55±0.75であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に上昇した。<u>養育レジリエンス下位尺度</u>：<u>子どもの特徴理解</u>において、受講前4.68±0.08、受講中5.05±0.07、受講後5.31±0.08であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に上昇した。<u>社会的支援</u>において、受講前5.14±0.10、受講中5.36±0.09、受講後5.52±0.10であり、受講前より受講中(p<.05)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に上昇した。<u>肯定的解釈</u>において、受講前5.51±0.09、受講中 5.72±0.09、受講後 5.97±0.09 であり、受講前より受講中(p<.05)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に上昇した。養育レジリエンスはトリプルP受講によって向上した。

２）**子育てへの適応：**<u>子育ての一貫性</u>において、受講前 6.13±0.22、受講中 5.46±0.23、受講後 4.27±0.21 であり、受講前より受講中(p<.01)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に改善し、トリプルP受講によって子どもの好ましくない情緒や行動に対して子育ての一貫性が高まった。<u>強制的なしつけ</u>において、受講前5.57±0.27、受講中4.68±0.28、受講後 3.02±0.18 であり、受講前より受講中(p<.05)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に改善し、トリプルP受講によって子どもの好ましくない情緒や行動に対して強制的なしつけは減少した。<u>前向きな励まし</u>において、受講前2.55±0.19、受講中1.83±0.16、

受講後 1.70±0.17 であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(n.s.)が有意に改善し、トリプル P 受講によって好ましい行動への前向きな励ましは上昇した。親子関係において、受講前 4.44±0.28、受講中 3.40±0.30、受講後 2.60±0.27 であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に改善し、トリプル P 受講によって親子関係は上昇した。家族関係において、受講前 4.68±0.26、受講中 4.02±0.22、受講後 3.59±0.24 であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.05)が有意に改善し、トリプル P 受講によって家族関係は上昇した。親のチームワークにおいて、受講前 4.17±0.26、受講中 3.73±0.24、受講後 3.45±0.26 であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(n.s.)が有意に改善し、トリプル P 受講によって家族関係は上昇した。

３）**精神的健康**（親としての適応）：

親としての適応において、受講前 8.14±0.18、受講中 7.38±0.18、受講後 6.63±0.18 であり、受講前より受講中(p<.001)と受講後(p<.001)、受講中より受講後(p<.001)が有意に改善し、トリプル P 受講によって親としての適応は上昇した。

発達障がいのある児の母親の養育レジリエンスおよび下位尺度はトリプル P の受講により向上し、子育ての適応、メンタルヘルスも向上させた。これまでのレジリエンス研究において、レジリエンスは、特別な能力や特性でなく、誰もが保有し得るものとされ、どの年代の人でも伸ばすことができると考えられている [8)]。レジリエンスは逆境や困難な状況に適応するときに機能し、向上すると考えられている。加えて、養育レジリエンスの向上には回避的または受動的な対応ではなく、「問題に焦点を当てた」対処法が有用であり、様々な逆境に最も効果的なアプローチであると指摘している。これは、問題の困難に寄与する環境や自分自身の特徴を変更するための積極的な対応が含まれる [9,10)]。トリプル P は母親が困難と感じている子どもの情緒や行動の問題を親の自己調整力を働かせて直接解決していく力を育む。これは回避型のコーピングや情緒型のコーピングと異なる。これらの解決方法は精神的健康も維持しやすく、親の自信にもつながると考えられる。今回の結果は養育レジリエンスモデルを支持する結果であり、トリプル P は以下のように位置づくと考えられ、更なる検証が必要である。

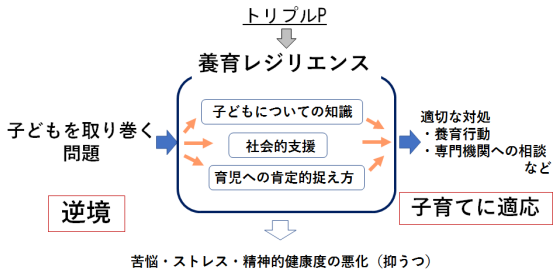

図1：養育レジリエンスモデル

Kota Suzuki, et.al. Development and Evaluation of a Parenting Resilience Elements Questionnaire (PREQ) Measuring Resiliency in Rearing Children with Developmental Disorders. PLOS ONE

引用文献

1)Baraitser,L. et.al A. Mother courage: Reflections on maternal resilience. British journal of psychotherapy,23 (2) ,171-188,2007.
2)Tully LA,Arseneault L,Caspi A,Moffitt TE,Morgan J. Does maternal warmth moderate the effects of birth weight on twins' attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) symptoms and low IQ? J Consult Clin Psychol 72,218-26,2004.
3)Turkheimer E,Waldron M. Nonshared environment: A theoretical,methodological、 and quantitative review. Psychol Bull,126,78-108,2002.
4) Sanders,M et al. Stepping Stones Triple P: The theoretical basis and development of an evidence-based positive parenting program for families with a child who has a disability. J Intellect Dev Disabil,29(3),265-283,2004.
5)Sanders,M et al. Stepping Stones Triple P: The theoretical basis and development of an evidence-based positive parenting program for families with a child who has a disability. J Intellect Dev Disabil. 29(3),265-283,2004.
6)Suzuki K, et al.Development and Evaluation of a Parenting Resilience Elements Questionnaire (PREQ) Measuring Resiliency in Rearing Children with Developmental Disorders. PLoS One. 3,10(12), e0146090,2015.
7)Sanders MR,et al. Parenting and Family Adjustment Scales (PAFAS): validation of a brief parent-report measure for use in assessment of parenting skills and family relationships. Child Psychiatry and Human Development, 45(3),255-272, 2014.
8) Grotberg EH. What is resilience? How do you promote it? How do you use it? Resilience for Today: Gaining Strength from Adversity. Praeger Publishers. 1-22.
9) Shapiro, D.L., et al. Adolescent survivors of childhood sexual abuse: the mediating role of attachment style and coping in psychological and interpersonal functioning, Child

Abuse & Neglect, 23, 1175-91,1999.
10)Stein, H., et al. Lives through time: an ideographic approach to the study of resilience, Bulletin of the Menninger Clinic,64, 281-96,2000.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）
清原智佳子,江上千代美(6 番目).発達障がいをもつ子どもの親を対象に行ったステッピングストーンズトリプルＰ受講前後のパイロット･スタディ,福岡県立大学看護学研究紀要 15, 47-53, 2018.
Egami, Chiyomi. Triple P intervention support to improve caregiving resilience for caregivers with children with developmental problems,10, 27-29,2018.

〔学会発表〕（計 8 件）
1.江上千代美,他.発達障がい児をもった母親の養育レジリエンス向上に向けた支援～母親の変化と子どもの行動～第 24 回日本 LD 学会,佐賀,2015 年.
2. 江上千代美,他.発達障害児をもつ母親の養育レジリンス向上－トリプル P による介入－第 42 回日本看護研究学会,つくば,2016.
3. 江上千代美,他.養育レジリエンスを高めよう,日本 LD 学会第 25 回大会,横浜,2016.
4. 江上千代美,他.養育レジリエンスを高める介入支援－トリプル P を用いた支援とその効果－日本 LD 学会第 26 回大会栃木,2017.
5.清原智香子,江上千代美.前向き子育てトリプル P の受講前後の親のストレス変化と子育て技術に関する研究,日本看護研究学会,第 22 回九州・沖縄地方会,佐賀,2017.
6.Chiyomi E, et al. The effect parenting resilience and triple P intervention, Asian and Oceanian Congress of Child Neurology（AOCCN）第 14 回アジア・大洋州小児神経学会,福岡,2017.
7.江上千代美,他.養育レジリンスに影響を与える要因の検討,日本看護研究学会,熊本,2018.
8.Chiyomi E, et al.THE IMPACT OF TRIPLE P ON PARENTING RESILIENCE OF CAREGIVERS WITH CHILDREN WITH DEVELOPMENTAL DISABILITIES, 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2019.

６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：田中美智子

ローマ字氏名：Michiko Tanaka

所属研究機関名：宮崎県立看護大学

部局名：看護学部

職名：教授
研究者番号（8 桁）：30249700

(2)研究協力者
研究協力者氏名：Matthew R. Sanders
ローマ字氏名：Matthew R. Sanders

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。